

国際学会実施報告書
The 2nd East Asian Translation Studies Conference

2016年7月9-10日

於明治大学駿河台キャンパス

主催者：

内藤まりこ (明治大学情報コミュニケーション学部専任講師)

グロリア・リー (Hong Kong Baptist University, Hong Kong)

ナナ・佐藤=ロスベアグ (SOAS, University of London, UK)

基調講演：

菅啓次郎 (明治大学理工学部教授)

“Translingualism, Autobiography, Fiction: Levy Hideo and On Yuju”

Prof. Mona BAKER (University of Manchester, UK)

“The Translation and Contestation of Political and Scientific Concepts across Time and Space: A corpus-based study”

目的と開催経緯：

The 2nd East Asian Translation Studies Conference は、近年、グローバル化の進行と共にその重要性が認識されている翻訳及び翻訳研究について、日本を中心とする東アジアの言語や社会、歴史の文脈において議論する場を提供することを目的とした。

本学会開催の経緯は、東アジアの言語の翻訳に関する学術会議として最大規模の East-Asian Translation Conference が 2014 年 6 月にイギリスの University of East Anglia (ノリッチ) にて開催された。この学会の成功を受け、東アジアの翻訳の発信地である東京にて第 2 回目の会議を開催することが企図された。2015 年 3 月～7 月末に発表要旨の応募を受け付け、2015 年 8～9 月に厳正なる査読の結果、発表者を決定し、2015 年 12 月末までに参加者による登録を受け付け、2016 年 2 月中に最終的なプログラムを確定した。

開催内容：

本学会では 2 本の基調講演、100 本の口頭発表、10 本のポスター発表、8 名の発表者による大学院生ワークショップが行われた。

基調講演は、文学・翻訳研究者で翻訳者としても国内外で活躍する菅啓次郎氏 (明治大学教授) 翻訳研究の第一人者であるモナ・ベイカー氏 (マンチェスター大学教授、イギリス) によって行われた。口頭・ポスター発表及び大学院生ワークショップには、翻訳研究

の第一線で活躍する研究者及び研究者をめざす大学院生が国内外から参加した。所属する研究機関の地域別の発表者の人数は、日本から 26 名、アジア（内訳：中国、台湾、マレーシア、韓国、シンガポール）から 45 名、北米（内訳：アメリカ、カナダ）から 22 名、ヨーロッパ（内訳：イギリス、アイルランド、ドイツ、フランス、イタリア、オーストリア、スペイン）から 17 名、オーストラリア・ニュージーランドから 10 名であった（以上の人数には co-author も含む）。

開催成果：

本学会開催の意義は、アジアで培われてきた翻訳思想や翻訳理論が、Translation Studies に果たす役割や重要性が議論されたことである。翻訳研究は 1970 年代以降、欧州連合において複数の公用語を設置するヨーロッパや、移民の流入により社会の多民族化が加速する北米やオーストラリア等の西洋諸国において、原文と翻訳との言語上の関係に留まらず、翻訳が生み出される政治的・歴史的文脈や、翻訳が果たす文化的な役割をも解き明かす学際的な研究として発展してきた。

しかし、近年、アジア、アフリカ、アラブ等、多言語状況が進行する地域において翻訳研究の重要性が認識され、日本をはじめ東アジアの翻訳に関する議論構築が期待されている。例えば、日本は古代から盛んに翻訳が行われてきた地域であり、近代には人々の翻訳ネットワークの中心地として東アジアの人々の翻訳活動を牽引してきた。そうした翻訳活動に関して、国内では着実に研究が積み重ねられてきたが、それらが海外に紹介される機会は少なく、実際には、翻訳研究においてアジア地域で実践されてきた翻訳の営為や体系化されてきた理論が鑑みられることはあまりない。

こうした状況に対し、世界中から翻訳研究者や翻訳者・通訳者が集う本学会において、アジアの翻訳の歴史や現状に関する議論が活発に行われることで、アジア地域において過去だけではなく現在進行する翻訳の実践や翻訳思想、翻訳研究が海外に紹介され、必ずしもアジアを対象としない研究者においてもその意義や役割が広く共有された。